

78巻3号

2023年7月1日

YAA 天文会報

(7~9月号)

797号

〒226-0016

横浜市緑区霧が丘 4-1-7-402

正木 仁 方

Mail: masaki@e08.itscom.net

HP: <http://home.n03.itscom.net/yaa/index.html>

横浜天文研究会



NGC6357 彼岸花星雲（左上） NGC6334 出目金星雲（右下）

撮影：山形幹夫

観望ガイド

正木

宵の明星・金星がしばらくのあいだは、夜の10時過ぎまで西より大きく北側の空に見えていたのですが、6月も後半となると9時半ごろには建物に隠れてしまうようになってきました。

ということで、金星の話題から…7月7日金星が最大光度（ -4.7 等）になります。これから急速に日の入り後の高度を下げていきます。16日にしし座のレグルスと接近、20日には水星・火星・三日月より細い月と並んで光る様子を見ることができます。お天気良ければ夕焼け空の微妙なグラデーションの変化をカメラに収めておきたいですね。日没後一時間たつと金星の高度が5度ほどととても低くなってしまいますので、西の空が開けた場所で早めに準備をしておく必要があります。翌21日は月と火星が接近します。水星と金星が一番近づくのは27日です。そして8月12日に内合となり、以降は明けの明星となります。

8月は13日にペルセウス座流星群が極大になります。極大時刻は13日17時と予想されており、月の影響は明け方に新月前の細い月があるだけですから一晩中良い条件で観測できます。夜空の条件が良ければ一時間に50個程度は見えるかもしれません。8月の流星群はもう一つはくちょう座 κ 群がよく知られていますが、極大が17日20時となっており、こちらも好条件で一時間に5個程度の出現が予想されています。

8月は、2日と31日が満月でひと月に2回満月があります。同じ月の2回目の満月をブルームーンと呼ぶこともあるそうですね。

9月29日は中秋の名月です。今年は9月29日18時58分が満月（望）なので、本当に真ん丸な十五夜さま・中秋の名月を眺めることができます。というのは、満月（望）は太陽・地球・月の位置関係で決まるのに対し、中秋の名月は旧暦（太陰太陽暦）の8月15日になります。また、月の公転軌道が楕円形のため、新月から満月までの日数が変化するので、満月と中秋の名月が同じ日になるとは限らないのです。ちなみに来年は、中秋の名月が9月17日、満月は翌18日になります。

暦がらみで七夕の話。七夕祭りをいつ行うかというと、7月7日のほかに8月7日にする地域もあり、さらに国立天文台は2001年から伝統的七夕（旧七夕）を、太陰太陽暦による7月7日に近い日として、二十四節気の処暑（太陽黄経が 150 度になる瞬間）を含む日からそれよりも前で、処暑に最も近い新月（朔）の日から数えて7日目が「伝統的七夕」の日と定義しています。現在の暦での7月7日は、まだ梅雨が明けていない地域もあり、星が見えるチャンスが少ないです。そこで国立天文台は2001年から「伝統的七夕」の日を広く報じていくことになりました。今年の「伝統的七夕」は8月22日で、確かにその方が梅雨時より晴れる確率は高いですし、おりひめ星・ひこ星も天高く見えます。

再びオーストラリアへ

山形幹夫

6月17日の夜はこの時期にも関わらず快晴となりました。あいにく家庭の都合で撮影に出かけることができませんでした。今年の夏もこれで終わったかなあと考えています。今年もスーパーエルニーニョ現象が発生するそうです。本現象が発生すると極端化した気象現象が多く発生すると言われていますので、今から心配です。今年に入って今だ撮影の成果がありません。勿論天候の影響が大きいことに間違いはありません。ということでこの7月に再びオーストラリアへ撮影に行くことにしました。行先は2019年10月782号で報告したチラゴーです。当地は



南緯17度ほどのため大マゼラン雲は周極星ではなく、この時期は見ることができません。かろうじて小マゼラン雲が明け方に昇ってきます。しかし北半球でハイライトとなる星座の殆どをみることはできませんので、日本で天候の影響により撮影機会が少なくなっていることに対して有効な撮影機会を得ることができる可能性が高いと考えています。本号表紙と左の画像は前回チラ

ゴーに行った時に撮影したものです。左の画像はNGC5139オメガ星団ケンタウルス座です。大きさが分かりにくいですが、満月とほぼ同じ大きさと言われています。撮影機材は表紙と同じく以下の通りです。

では、天候に恵まれ撮影に成功しましたら次号でご紹介させて頂きたいと思います。祈、快晴！

【表紙写真】 NGC6357彼岸花星雲（左上） NGC6334出目金星雲（右下） さそり座
撮影日：2019年7月30日 撮影地：オーストラリア チラゴー FSQ-85EDP+フラットナー 架台：Mark-X カメラ：Nikon D810A ISO3200 90秒×8

日月星の伝承を訪ねて (76)

横山好廣

横浜金沢の星 ②

文末で調査地と調査年月日を示した。調査地に断りがないときは金沢区内の町名である。話者の氏名・年齢も表記したが年齢未詳のときは(・)と示した。

おうし座 ヒアデス星団

●ツリガネボシ (釣鐘星)

- ・野本芳五郎氏 (91) は「ツリガネボシは五つからなっていて、釣鐘の形をしている」と、図示してくれた (富岡 1983. 7. 25)。
- ・金沢区の隣の磯子区氷取沢町の岡本氏(・)に「カネボシ」という名を聞いたが、特定することが出来なかった。もしかすると「ツリガネボシ」の可能性がある (磯子区・氷取沢 1983. 7. 27)。
- ・横浜市内では、旭区善部町の今井守正氏 (87) が「ツリガネボシは片側が開き、もう一方が狭くなっている」と図示してくれた。(旭区・善部 1983. 2. 12)。

おうし座 プレアデス星団

●スバル (昴)

- ・野島の川島商店主 (86)、木川宇之吉氏 (70) からは「時間の目安にした」と、黒川秀吉氏 (78) からは「スバルは星が集まっていて、サンギより東側にある。漁具にもスバルというものがあり、延縄が切れたときに引っかけてあげる道具だ」と採録した (野島 1982. 7. 27)。
なお、上記の漁具「スバル」を近くの柴漁港では「カツォー」と称することを斉田信夫氏(78)から聞いた(柴 2010. 9. 19)。
- ・富岡で柳下保三氏(・)から「スバル」、野本芳五郎氏 (91) から「スバルとサゲボシは時計の役目をした」を採録した (富岡 1983. 7. 25)。
- ・浜田八十八氏 (73) から「スバルは七つくらい固まっていて、6月半ば頃のミアケに東から出る」と採録、ミアケとは夜明け前のことらしい (富岡 1983. 7. 26)。
- ・斉田信夫氏 (78) から「スバルは星が集まってボヤっとして菊の花のようだ。夏、夜明け前に出てきて、高く上る前に空は明るくなるので見えなくなる」と採録。また、同氏は金沢区役所発行の『私の語る金沢』(1998 発行)の誌上で「昔は星座で時間をはかった。夏など夜、船で海に出ていくと夜空にスバルが上がってくるので大体何時か分かった。スバルというのは固まっている星 (要約)」と話していて、スバルは時計の役割を果たしていたことがわかる。

同氏からは、さらに加えて「スバル満時 蕎麦の旬」と聞いた。十五夜の頃、明け方にスバルが真上にくると蕎麦の収穫の旬になるという話だ。しかし、同氏も同席し製本化された『私の語る金沢』には種蒔きの旬と記録されていて、収穫という説明は気になるところであるが、農事暦とスバルの結びつきを示す良い例である。

こういう事例は小柴の生業形態は半農半漁であったことを示唆する伝承である。純漁村の雰囲気は濃厚な柴町で蕎麦に関する伝承に出会うとは意外なことであった（柴 2010. 9. 19・25）。

●スガルボシ（昴）

- ・ 齊田亀三郎氏（80）から「スガルボシは星がいっぱい集まっている」と採録。スガルボシはスバルの転訛であろう、柴の漁師達の昔の言い方かもしれない（柴 1981. 10. 3）。

* スバルは時計であり、蕎麦の種蒔きや収穫の時期の目安としても生活に欠かせない存在であったことがわかる。なお、三浦半島にも蕎麦の種蒔きに関する伝承が残っていて、横須賀・長井漁港で数人の漁師から「スバルの山入は麦蒔きの盛り」と採録したことがある（横須賀長井 1982. 8. 25）。

オリオン座 三星

●ミツボシ、ミツボシサマ（三ツ星）

- ・ 鹿島嘉輔氏（・）から「ミツボシ」を採録（富岡 1983. 6. 12）
- ・ 柳下保三氏（・）から「ミツボシは夜明け前、東から上がる」と採録（富岡 1983. 7. 25）。
- ・ 小林マキ氏（74）から「ミツボシサマ」と採録（釜利谷 1983. 11. 13）。
- ・ 齊田亀三郎氏（80）から「ミツボシ・サンガイボシは夏の地引網の目安で、夏は夜明け前に東から上がる」と採録（柴 1981. 10. 3）。
- ・ 乙舳（おっとも）の釣り宿・修司丸の船頭からは「ミツボシ、サンギは東の方角を確かめる手立て」と採録（乙舳 1990. 6. 13）。

●サゲボシ、サゲボシサマ、サガリボシ（三ツ星）

- ・ 浜田八十八氏（73）から「サゲボシは土用の頃、ミアケには東の方に出る。三尺間隔で三つ天から下がっているようだ。この時期はワタリガニや車エビの最盛期になる」と詳しい説明（富岡 1983. 7. 26）。
- ・ 野本芳五郎氏（91）からは「サゲボシは時計の役目をしていた」と採録（富岡 1983. 7. 25）。
- ・ 小泉すぎ氏（80）からは「あら、サゲボシサマがよく出てらっしゃっせ。明日も天気がいいよ」とローカル色の濃い日常会話を聞いた。天気予兆もになっていたようだ（釜利谷 1982. 5. 29）。
- ・ 田中はな氏（86）からは「西の方にサガリボシが出ると縁起が悪い」と採録。当初は話者の勘違いではないかと疑っていたが、世の中で有

り得ない事柄の例えにオリオン三星の出入りを引用した格言であると考えている。つまり、三星は真東から縦一文字に現れ、沈むときは真西に横一文字であることを承知して生まれた格言で、三星が真西に縦一文字に下がることは絶対有り得ないことを意味し、有り得ないことが起きるのは縁起の悪いことだと論しているのであろう。

*浜田氏のサゲボシが三尺の間隔で天から下がっているという表現が面白い。三尺云々は三間星の発想とつながっている。天から下がっているというのはわかり易い表現であるが、サゲボシの呼称を三浦半島で聞くことは出来ていない。数少ない事例は、横浜市南区堀之内の明治44年生まれの林安太郎氏(69)からである(1980.10.8)。

●サンゲンボシ(三ツ星)

- ・布川五作氏(・)から「サンゲンボシ」を採録(釜利谷1981.6.1)。
- ・石井三郎氏(・)は「サンゲンボシは明け方に、このように出てくる」と星が縦に三つ並ぶ形を図示してくれた(釜利谷1981.6.1)
- ・野島の川島商店主(86)から「サンゲンボシ、スバルは時刻の目安」と採録(野島1982.7.27)。

*サンゲンボシとは、三ツ星の見かけの長さを三間と表現しているのであろうか、それともサゲボシの転訛であろうか。

小生の数少ない調査では、サンゲンボシの採録は三浦半島では横須賀市域(走水・鴨居・佐島)に濃い傾向があり、三浦市域での採録がないのが面白い。

●サンガイ、サンガイボシ(三ツ星)

- ・斉田亀三郎氏(80)から「サンガイボシ」を「ミツボシ」と併せて採録。夏、夜明け前に東から出て、地引網の目安になっていた(柴1981.10.3)
- ・斉田信夫氏(78)からは「夏は車エビ漁で明け方まで沖にいた。明け方頃になると東からサンガイが上がってくるが、大島行きのたちばな丸やきく丸も中ノ瀬を通っていく。サンガイや大島行きの船は時計を持っていなかった漁師には時間の目安であり、もうそろそろ漁を終える目安になった」と詳しい話があった(柴2010.9.19)。

上記の内容とほぼ同様の話を三浦市南下浦町金田の漁師・岩野清行氏(84)から、聞いていたので驚いた。なお、岩野氏はサンガイと言わずにミツボシと称していた(三浦金田2007.11.14)。

- ・釜利谷で野島出身の主婦(・)から「サンガイボシ」の呼称を採録(釜利谷1982.5.29)。
- *当初は単純に三階星と思っていたが、内田武志氏は自著『星の方言と民俗』(岩崎美術社1977)の中で語尾のガイは星の意であろうと述べている。その説に従えばサンガイはまさに三ツ星ということになる。

●サンギ、サンギボシ（三ツ星）

- ・野島と隣接する乙舳の釣り宿・修司丸の船頭から「サンギ」を「ミツボシ」と併せて採録。その内容はミツボシの項に記載したが方角に着目していることに留意したい（乙舳 1990. 6. 13）
 - ・田丸貞吉氏（・）は「サンギは夏には東から出る。時刻の目安になった。東から上がるときは縦に三つ並んでいるが、その後は斜めに傾き右上方に動く」と説明（野島 1982. 7. 29）。
 - ・木川宇之吉氏（70）から「サンギはサンギボシのこと。同じ明るさの星が一直線に三個並ぶ。方向を調べる大切な星」と採録（野島 1982. 7. 27）。
 - ・黒川秀吉氏（78）からは「サンギは、夏は朝早くに出る」と採録（野島 1982. 7. 27）。
- * 「サンギ」の呼称は野島に集中するのが特徴的。オリオン三星が時間の目安だけでなく、方角を知るための大切な星であるという認識は重要。漁に出たら方角を正しく掴むことは生死にかかわることである。「サンギ」は易占に用いられる長さ約 10 cm の方柱状の角棒「算木」というのが通説である。しかし、和算で使われた木製の小さな角棒も「算木」という。野島の「サンギ（ボシ）」は何れの意味であったか不明である。サンギの呼称については逗子の小坪漁港で 81 歳の漁夫からも後日採録した（逗子小坪 1985. 5. 12）。

●タケノス（三ツ星）

- ・岩手県九戸郡軽米町出身の主婦、黒川マスミ氏（36）によると、子供の頃「タケノスが出たらもう寝なさい」と言われたそうである。タケノスは勿論オリオン三星のこと。竹の節に由来する星の方言名である。この名を横浜で聞くと、とても驚いた（野島 1982. 7. 29）
- * オリオン三星について改めてまとめてみて、金沢区で得たその和名の種類の多さに感心している。その考察は検討課題である。

今此处で言えることは、オリオン三星は金沢の半農半漁や農業中心の何れの集落において、最も人々の生活に結びついていた星であったということである。時計代わりであり、方角を知る目安であり、蕎麦の栽培や漁（地引網・ワタリガニ・車エビ）とも関係の深い星であった。伝承されてこなかった事柄もあるかと思う。オリオン三星の役割はもっと大きかったと想像に難くない。

（つづく）

天 象

相原 榮

7月

水星：夕方の西北西天～西天低空 $-2.2 \sim +0.1$ 等 ふたご→かに座

金星：夕方の西天(宵の明星) $-4.6 \sim -4.7 \sim -4.3$ 等 しし座

火星：夕方の西天低空 $+1.7$ 等 しし座

木星：夜半に昇る $-2.2 \sim -2.3$ 等 おひつじ座

土星：宵に昇る、観望好期 $+0.7 \sim +0.6$ 等 みずがめ座

3日 20h39m 満月

7日 17h31m 小暑

10日 10h48m 半月(下弦)

宵の西天で金星・火星・レグルスが集合

12日 未明の東天で月が木星に接近

13日 未明の東天で月が天王星に接近

18日 03h32m 新月

20日 夕空で水星・金星・火星と月が集合

21日 夕方の西天で月と火星が接近

23日 10h50m 大暑

26日 07h07m 半月(上弦)

28日 夕方の西天低空で水星・金星・レグルスが集合

29日 みずがめ座 δ 流星群が極大の頃(悪条件)

31日 03h やぎ座 α 流星群が極大の頃(悪条件)

8月

水星：夕方の西天低空 $+0.1 \sim +2.8$ 等 しし→おとめ座

金星：夕方の西天低空 $-4.3 \sim -4.1 \sim -4.6$ 等 しし→かに座

火星：夕方の西天低空、宵に沈む $+1.7$ 等 しし→おとめ座

木星：明け方南中 $-2.3 \sim -2.6$ 等 おひつじ座

土星：夜半前に南中、観望好期 $+0.6 \sim +0.5$ 等 みずがめ座

2日 03h32m 満月

3日 宵の南東天で月と土星が接近

8日 03h23m 立秋

19h28m 半月(下弦)

9日 未明の東天で月と天王星が接近

13日 17h ペルセウス座流星群が極大の頃(好条件)

14日 未明にペルセウス座流星群が観望好期

16日 18h38m 新月

17日 20h はくちょう座 κ 流星群が極大の頃

23日 18h01m 処暑

24日 18h57m 半月(上弦)

31日 10h36m 満月(今月2度目の満月でブルームーン)

9月

水星：明け方の東天に昇る、後半は観望好期 $+2.8 \sim +5.5 \sim -1.0$ 等 おとめ座

金星：明け方の東天に昇る(明けの明星)、観望好期 $-4.6 \sim -4.8 \sim -4.7$ 等 かに→しし座

火星：夕方の西南西天低空 $+1.7 \sim +1.6$ 等 おとめ座

木星：夜半前の東天に昇る、観望好期 $-2.6 \sim -2.8$ 等 おひつじ座

土星：宵に南中、観望好期 $+0.5 \sim +0.6$ 等 みずがめ座

5日 未明の天頂付近で月と木星・天王星が接近

6日 未明に月がプレアデス星団に接近

7日 07h21m 半月(下弦)

8日 06h27m 白露

9日 金星がかに座の散開星団 M67 に接近

10日 08h 9月ペルセウス座流星群 ε 流星群が極大の頃(好条件)

12日 04h32m 月が金星の北 $10^\circ 49'$ を通過

15日 10h40m 新月

23日 04h32m 半月(上弦)

15h50m 秋分

29日 18h58m 満月(中秋の名月)